塗師の歳時記　第一回　うぶ出し

文　赤木明登

能登人は、冬の間じっとしている。四月になって、ようやく根雪も解けて、梅と桜に、桃、梨、林檎といった果実花、樹下には菜の花も水仙も、一気に咲き揃うと、人もようやく動き始める。

やがて、濃厚な春の気配に相応しからぬ、ひねた爺さんが、ふっと僕の工房にやって来る。「ご無沙汰でござんす」。「あれ、今度の冬は寒ぶかったもんで、もう死んじゃったのかと思ってましたヨ」。「なにい。春にあんたの顔見るまでは、死にゃあしませんぞ。ところで例のものはできておるかいの」。僕はニヤリと笑って、包みを預ける。それからひとしきり、隣の婆さんから始まって、寺の坊主から果ては総理大臣まで、とにかく人の悪口がつづく。「人間、そこまでひねくれると、一流ですねェ」。僕が笑うと、横を向いたまま煙草を吹かす。

「うぶ出し」という仕事をご存じだろうか。「田舎の年寄りをだまくらかして、蔵を開けて、値打ちあるもんを掘り出しては、煙草銭程度で買うてくるのよ」と、当の本人がうそぶく。つまり古道具屋の仕入れ最前線。集めた品物は、業者だけが参加できる「うぶの市」で競りにかけ、金に換える。頼んでおくと、珠洲壷でも合鹿椀でも葛布でもこの辺りにあるものなら何でも見つけてくれる。値段は、銀座の古美術商で僕が知っているものの十分の一もしない。いったいいくらで品物を仕入れてくるのか？　訊いたこともないが、彼を通じて業界のシステムがおおよそ理解できた。品物を売るときも、それなりに誠実で、強面の言動によらず、実は結構いい爺さんなのである。

僕が預かっていたのは、傷みのある漆器類で、「見栄えのええよう繕っといてくれんか」と、頼まれるのだ。さんざっぱら悪態をついたあげく、不意に立ち上がり「ほんなら、おせっかく」と言い残し、畳の上に新聞包みを置いていく。中身の膳椀が、僕のお目当て。繕いの駄賃は、江戸期の輪島塗である。二十数年、うぶ出しの爺さんにつきあったおかげで、水屋棚二棹にいっぱいの漆器資料が集まった。いずれも傷気のある半端物ばかりで骨董的価値はないが、僕にとっては宝の山だ。常住坐臥、見つめ、触りつづけると、その遺伝子が僕の身体に染みこんでいく。その探求と成果を形にしている。輪島塗というと、豪華絢爛の蒔絵の世界を想起される方が多いが、実は加飾は近代以降の流行。江戸の昔、輪島は無地の、無骨だが実用的な漆器の産地であった。僕が、目指すのは輪島塗の原点に立ち戻ることなのだ。

いつの春からか、爺さんを見かけなくなったが、膨大な古漆器は僕の手元に残っていて、今も新たな器を生み出しつづけている。

あかぎ あきと｜1962年岡山県生まれ。輪島塗の下地職人・岡本道のもとで修業、94年に独立。97年、ドイツ国立美術館「日本の現代塗り物十二人」、2000年、東京国立近代美術館「うつわをみる 暮らしに息づく工芸」に選ばれる。著書に「漆塗御物語」（文藝春秋）、「美しいもの」（新潮社）など。www.nurimono.net/

写真 雨宮秀也

赤木明登作「時代四つ椀」
輪島塗（本堅地塗立）、素材：欅、国産漆、輪島地粉、綿布
高さ9cm（径14cm）、高さ6cm（径13cm）、高さ4cm（径12cm）、高さ2.7cm（径11cm）4点揃い